

P21

初診時3歳2ヵ月男児乳歯外傷経過の1例

○佐伯 桂、森川和政、野村信人、牧 憲司
九歯大・小児歯

【はじめに】

乳幼児は、歩行の不安定や危険に対する注意不足、回避の遅れなど行動に多くの未熟さを持っている。そのため日常生活の中で、事故により口腔領域に外傷を受け、小児歯科医院に来院することが少なくない。今回、我々はその1例として、初診時3歳2か月男児の上顎両側乳中切歯外傷の経過について報告する。

【症例】

患児：3歳2か月 男児

初診日：平成20年4月28日

主訴：上顎前歯部の打撲による痛み

現病歴：初診時前日、自宅のテーブルで顔面を強打し口腔内から出血が認められたが、しばらくすると止血を確認できたため様子を見ていた。翌日になって患児が痛みを訴えたため当科を受診した。

既往歴：特記事項なし

診断：上顎両側乳中切歯の亜脱臼、振盪、および上下顎前歯部歯肉、下唇裂傷

治療経過：外傷歯治療ガイドラインに沿い、固定は必要ないと判断し経過観察とした。受傷1か月後に上顎左側乳中切歯の歯冠の変色が認められたが、受傷2か月後、変色は消退し、受傷9か月後には、歯髓腔の閉塞が認められた。現在、経過は良好である。

【考察】

乳歯外傷では、受傷歯の歯根により、後継永久歯胚が傷害されることが少なくない。後継永久歯胚への影響は歯胚が幼若であればあるほど大きくなると考えられているため、外傷歯の後継永久歯が萌出するまで、長期的な経過観察が必要である。

P22

幼児期から成人まで定期診査を続けたダウン症患者の経過

○毛利 元治

もうり小児歯科（福岡市）

【緒言】

ダウン症患者は医療環境の改善で2才児の平均余命が52才を超え、歯科も長い人生を前提にした対応が求められる。今回、幼児期から20年以上の定期診査を続けたダウン症患者の経過から、今後の課題を考察したい。

【症例】

症例1) 初診時3才3ヶ月の女児で、心臓手術を終え、発語はなかった。7才で上顎側方拡大を試みたが中止、著しい交叉咬合に陥り、永久歯に楔状欠損が多発した。最終時は28才、意思伝達は指文字、昼夜逆転生活になり、家族も姉の入院など苦労が多い。永久歯う蝕はないが、歯肉縁下に及ぶ楔状欠損のため、この修復と歯周管理に追われている。症例2) 初診時1才4ヶ月の女児で、歩行困難、斜頸、斜視、言葉の遅れを伴い、摂食訓練も受けた。当院では上顎側方拡大を繰り返し、交叉咬合を防いできた。最終時は24才で、自閉症も加わり定期的来院が難しくなった。永久歯う蝕は1歯、歯周組織も健全だが、臼歯部被蓋が浅くなってきた。症例3) 初診時4才10ヶ月の女児で、生後6ヶ月までチューブ授乳、言葉は理解できた。狭口蓋の対応を勧めたが、希望が出なかった。最終時は25才で、母の病気入院で来院が途絶えた。永久歯う蝕は1歯、歯周組織も健全だが、著しい歯列狭窄と開咬になった。

【考察】

家族の援助で、う蝕と歯周予防は成果を上げた。しかし、2例が著しい交叉咬合に陥り、うち1例に楔状欠損が多発し、咬合対応の工夫が必要である。一方、新たな障害や家族の問題が生じ、家族への支援も求められた。